平成二十八年度　学　力　検　査　問　題

国　　語

（九時二十五分～十時十五分）
〈五十分間〉

受検番号	第　　番

注　　意

1　解答用紙について

(1)　解答用紙は一枚で、問題用紙にはさんであります。

(2)　係の先生の指示に従って、所定の欄二か所に受検番号を書きなさい。

(3)　答えはすべて解答用紙のきめられたところに、はっきりと書きなさい。

(4)　解答用紙は切りはなしてはいけません。

(5)　解答用紙の※印は集計のためのもので、解答には関係ありません。

2　問題用紙について

(1)　表紙の所定の欄に受検番号を書きなさい。

(2)　問題は全部で五問あり、表紙を除いて十二ページです。

○　印刷のはっきりしないところは、手をあげて係の先生に聞きなさい。

1　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（25点）

高杉潤五、赤緒梓、初田稚以子（はっち）は、南和中学校の同級生である。学校新聞の写真係だった初田は、中学校最後のテニス大会で敗退し一人泣きじゃくる赤緒の写真を学校の壁新聞に載せたことで、赤緒を激怒させてしまう。中学卒業後、三人は別々の高校に進学した。高校二年生になったある日、友人の寺川から初田が父親と海外に行ってしまうことを聞いた高杉は、赤緒とともに初田の見送りに行くことにした。

世間的にはゴールデンウィークの初日となる、四月の最後の土曜。学校も休みが続くが部活はほぼ毎日ある。とはいえ平日の朝練に比べたら開始が遅いので、朝七時半に福井駅を発つ特急列車に乗るはっちの見送りには行くことができた。

福井駅の改札前のコンコースで一年ちょっとぶりに会ったはっちは相変わらず小さくてコアラみたいにもっさりしていた。その小さい背中にのしかかるほどの巨大なリュックサックを背負い、それとは別に大ぶりのカメラバッグを大事そうに※袈裟懸けにしていた。

「それ自分で棚にあげれんやろ、はっち。おれ中まで送ってくけ？」

①文字どおりの意味で荷が勝っている。半ばあきれて申しでたが、はっちは「大丈夫大丈夫。近くの人に頼むで。」と手をぱたぱたと振って遠慮し、はにかみ笑いを浮かべた。

「わざわざ来てくれただけで嬉しいし。ありがとぉ……赤緒ちゃんも。」

すこしおそるおそるといった、尻すぼみの声になって高杉の隣に顔を向けた。

高杉の陰に身体半分隠れた赤緒がぶすっと口を尖らせて顔を背けた。まだ強情張ってるのか……肩越しにそれを見やって高杉は溜め息をつき、

「赤緒。最後なんやぞ。ほんでいいんけ。」

「あはは。最後とかは大げさやよー。二年したらいっぺんは帰ってくるし。」

はっちが柔らかく笑って言った。

「ほやかって……二年後なんておれら卒業してるし。」

二年後にはっちが福井に帰ってきたとして、福井に残っている同級生は少ないだろう。多くの者は高校を卒業したら地元を離れる。※福蜂バレー部のOBたちもバレーの環境が整っている全国各地の大学へ進学しているし、まだ漠然とした希望ではあるが、高杉もそうしたいと考えている。

逆に言えば高校卒業まではだいたいみんな地元にいるものと思っていた。学校が違っても地元にいれば顔をあわせることはあるし、どうせ県内で若者が行く場所なんて限られている。会う機会はいくらでもあるだろうと気軽な感覚でいた。――その猶予が突然消失するなんて、想像もしていなかった。

はっちの父親がカメラマンで、新聞社に勤めているというのは聞いたことがあった。しかしずっと単身赴任で東京の支社に行っていたことは先日寺川に聞いて初めて知った。はっちが父親のお下がりだというフィルムカメラにこだわりを持って使い続けていたのには、一緒に暮らせない父親への想いも何割かはあったのかもしれない。

その父親がフリーに転身して海外へ赴くというので、父親のもとでカメラの勉強をしつつ自分も世界をまわりたいと、はっちもついていくことにしたらしい。それにしても思い切った決断だ。

「海外っつっても、どこ行くんや？」

「東京でお父さんと合流して、ちょっとのあいだ東京にいると思うけど、五月から中国行くんやって。あとのことはまだわからんけど、まずはアジアまわるんやと思う。」

②「わからんって……すげぇな。」

けっこうあっけらかんとしたはっちの言い方に唖然とした。その種の冒険心は高杉にはないものだ。

小さい身体に、背負ったリュックサックに負けないほどの大きな夢が、今、いっぱいに詰まっていた。垢抜けない印象だった彼女がキラキラして見えた。

「赤緒ちゃんに会えたら、渡したいもんがあったんや。」

はっちがカメラバッグを引き寄せて外ポケットからなにかを引きだした。数枚の写真だった。

「春季ジュニアのなんやけど。」

「春季ジュニアって、こないだのけ？」

高杉のほうが驚いてつい口を挟んだ。高杉が気にもしていなかった赤緒の試合のスケジュールをはっちはわざわざ調べて会場に足を運んでいたのか。

※尋慶女子テニス部の統一感のあるユニフォームに身を包み、サンバイザーをきりりとかぶった赤緒の姿が写真の中に見えた。

「はっち、撮りに来てたの……？」

赤緒も驚いたように呟き、一瞬※逡巡したものの、高杉の横にでてきて気まずそうな手つきで写真を受け取った。

「勝手に行ってもてごめんなさい……。優勝おめでとう。すごいよ。※ひっですごいって思ったよ。」

鍛えられた両脚をしっかりと開いて人工芝のコートを踏みしめ、集中した顔つきで構える姿。唇をすぼめて気を吐きながらオーバーヘッドサーブを放つ姿。構えの一つ一つ、プレーの一瞬一瞬で凜々しい表情を見せる赤緒が、どの写真にも捉えられていた。

手もとで一枚ずつ写真をめくる赤緒の顔をはっちが不安そうに窺っている。硬かった赤緒の表情がすこしずつほぐれていき、唇に微笑が浮かぶ。

「やっぱりはっちが撮ってくれる梓が一番美人やなあ……。」

なんて、半分自画自賛の呟きがその唇から漏れた。

はっちが赤緒の号泣写真を壁新聞に載せて激怒された一件以来、高杉もひさしぶりにはっちが撮った赤緒の写真を見た。高校生になってから赤緒がテニスをしている姿を見るのは初めてだったが、中学時代以上に力強さと華やかさを備えたそのプレー姿③は、間違いなく女王にふさわしかった。やはり赤緒には〝一番〟が似合う。

めくった写真を眺めては一番下に送るという作業を数枚続けたところで、赤緒がなにかに気づいて一度手をとめた。

「これ……春のと違う。新人戦や。はっち新人戦も来てたんか……？」

そこまでの写真とはたしかに違う会場のようだった。なにより四月のやわらかな陽射しとはその角度と強さが明確に違う。夏場のぎらつく陽射しの下で、サンバイザーの陰になっていても赤緒の顔が精悍な色に焼けているのがわかる。

九月の新人戦の三位決定戦だ――写っている対戦相手のユニフォームを見て高杉もピンと来た。

次の写真はネット越しに対戦相手と握手を交わしている姿だった。両者譲らずゲームを奪りあい、タイブレークにもつれ込む長試合だったと聞いていた。激戦をもぎ取った赤緒の顔には満足しきったような、しかし礼節を忘れない抑えた笑みが乗っていた。

次の一枚をめくった瞬間、赤緒の指がびくりと固まった。

握手を終えて相手と互いに背を向け、コートを離れるところを写したものだった。

赤緒が立ちどまり、空を仰いで泣いていた。おそらく見ている人々も大勢いるだろうに、堪えき

れなくなったように――ラケットを持った手をだらりと下げ、天に向かって雄叫びをあげるかのように口をいっぱいに開き、大粒の涙をぼろぼろと頬につたわせて大泣きしていた。中三の惨敗のときの写真と同じく見る影もないほど不細工な顔で、けれど今度は悔し涙ではない涙を流していた。

「あっ、誰にも見せてえんよ。」

息を呑んで写真を凝視するだけの赤緒にはっちが慌てたように言った。

「ほやけどわたしはこれ、いい写真やと思う。ほんとはみんなに見て欲しい……。」

上目遣いに赤緒の顔色を窺いながら怖々と、けれど頑固にあのときと同じ主張を繰り返した。

「……ひどい顔やな。」

吐き捨てるように赤緒が言った。

「ひっどい顔。最悪。」

④「いい写真やな。」

二人の頭の上から高杉が呟くと赤緒が驚いた顔を向けてきた。はっちもはっとしたように顔をあげた。

胸にこみあげてくるものを感じながら高杉は写真を見下ろす。知らなかった――メールで軽くお祝いを言ったときには赤緒からも淡泊な返事が返ってきただけだったから。この写真を見なければ知ることはできなかっただろう――「こんなに、嬉しかったんやな……。」

あのとき一人きりでコートにぶつけた感情を、自分だけの胸に刻みつけ、不屈の根性ではいあがってきて、つかみ取った一勝だ。

「おまえが一年間向きあってきたもんが、ここに詰まってる。いい写真やと思うぞ。この写真も、中三んときの写真も……。」

目を見開いてこちらを見あげている赤緒の顔をちらりと見て、つい照れ笑いを浮かべつつ。

「仲間として、おれが誇りに思う赤緒梓や。」

赤緒が顔を伏せて再び写真に目を落とした。

「……ひっどい顔や。ただの三位やのに、あほみたいに取り乱して。」

とまた吐き捨てる。しかし笑うような息を小さく漏らし、

「ほやけど、最っ高に気持ちよかったんやー……。この顔と、あのときの顔と、繋がってるんやの……。」

あの日のことを思いだして噛みしめるように呟いた。

「ほんっとはっちは頑固やのぉ。さすがに梓も負けたわ。……中学んとき……ごめん。」

ぽつりとした声とともに、写真を持った赤緒の手にぽつりと一つ、涙が落ちた。

ずっと不安なまなざしで赤緒を見つめていたはっちが、ほっとしたようにくしゃっと表情を崩した。写真を持ったまま赤緒が両手をはっちの首にまわして抱きしめた。⑤大きな荷物と赤緒のあいだに挟まれた小さいはっちが、泣き笑いの顔で首を振った。

巨大なリュックが若干危なっかしく、けれど意気揚々と改札を抜けて階段を上っていくのを見送った。赤緒も赤緒らしい華やかな笑顔で手を振っていた。目はすこし赤かったがもう泣いてもいなかった。

「病気せんようにだけ気ぃつけてな。はっち……飛びたて！」

と、明るい声を贈って赤緒自身もジャンプした。リュックの向こうから小さな手が現れて、ぐっと拳を握ってみせた。

（壁井ユカコ著『強者の同盟』による。一部省略がある。）

（注）※袈裟懸け……一方の肩から他方のわきの下へ斜めにかけること。
※福蜂バレー部……高杉が所属する福蜂工業高校男子バレー部のこと。
※尋慶女子テニス部……赤緒が所属する尋慶女子高校テニス部のこと。
※逡巡……ためらうこと。
※ひっで……福井県の方言。とても。

問1 ①文字どおりの意味で荷が勝っている。とありますが、これは、はっちのどのような様子を表していますか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。（4点）

ア はっちが、その小さな身体には不釣り合いなほどの巨大な荷物を持っている様子。
イ はっちが、父親のお下がりのフィルムカメラをこだわって使い続けている様子。
ウ はっちが、東京でカメラの勉強をするには必要のない荷物まで背負っている様子。
エ はっちが、背負ったリュックサックに負けないほどの大きな夢を抱えている様子。

問2 ②わからんって……すげぇな。とありますが、高杉は、はっちのどのような決断をすごいと感じたのですか。次の空欄にあてはまる内容を、三十字以上、四十字以内で書きなさい。（6点）

30
40
というはっちの決断。

問3 ③そのプレー姿とありますが、それが具体的に表現されている連続する二つの文を本文中から探し、最初の文のはじめの五字を書き抜きなさい。（4点）

問4 ④いい写真やな。とありますが、次は、高杉がこのように発言した理由をまとめたものです。空欄にあてはまる内容を、三十字以上、四十字以内で書きなさい。（6点）

この写真は、赤緒が中三の惨敗のときの悔しさを
30
40
と思ったから。

問5 ⑤大きな荷物と赤緒のあいだに挟まれた小さいはっちが、泣き笑いの顔で首を振った。とありますが、このときのはっちの心情を説明したものとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。（5点）

ア 赤緒が泣きながら抱きしめてきたことに照れ笑いしながらも、自分の写真の実力を認めさせたことに満足している。

イ 赤緒を激怒させてしまった自分の写真の技術に不安を感じていたが、手渡した写真を赤緒が喜んでくれたことに安心している。

ウ 自分の写真が再び赤緒を傷つけてしまったことを悔やむ一方で、それでも自分の夢を応援してくれる赤緒に対して感謝している。

エ 赤緒の謝罪の言葉をきっかけに、それまで感じていた不安から解放され、自分の写真への思いが赤緒に伝わったことを喜んでいる。

2 次の各問いに答えなさい。（22点）

問1 次の――部の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に改めなさい。（各2点）

(1) 勢力の均衡を保つ。
(2) 俊敏な動きを見せる。
(3) 命の大切さを諭す。
(4) 興奮して頬をコウチョウさせる。
(5) 巧みに機械をアヤツる。

問2　次の――部が**連用修飾語**になっているものを、ア～カの中から**二つ**選び、その記号を書きなさい。（3点）

そしてすぐに、エーミールが収集をしまっている二つの大きな箱を手に取った。どちらの箱にも見つからなかったが、やがて、そのチョウはまだ展翅板にのっているかもしれないと思いついた。はたしてそこにあった。とび色のビロードの羽を細長い紙切れに張り伸ばされて、ヤママユガは展翅板に留められていた。ぼくはその上にかがんで、毛の生えた赤茶色の触角や、優雅で、果てしなく微妙な色をした羽の縁や、下羽の内側の縁にある細い羊毛のような毛などを、残らず間近から眺めた。

（ヘルマン・ヘッセ著　高橋健二訳『少年の日の思い出』による。）

問3　次の――部と同じ構成（成り立ち）になっている熟語を、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。（3点）

勝利に歓喜する。

ア　匿名　　イ　豊富　　ウ　出納　　エ　雷鳴

問4　次の会話の空欄にあてはまる最も適切な敬語の表現を、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。（3点）

先　生「おうちの方に、明日、家庭訪問にうかがいますと伝えてください。」
生　徒「はい。明日、先生が（　　）と伝えておきます。」

ア　おじゃまする　　イ　うかがわれる　　ウ　おいでになる　　エ　まいられる

問5　次のことわざや慣用句、故事成語などに関する会話の空欄Ⅰにあてはまる内容として最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。また、空欄Ⅱにあてはまる言葉を漢字二字で書きなさい。（3点）

生　徒「私は『気がおけない』という言葉を『安心できない』という意味で理解していましたが、正しくは『（　Ⅰ　）』という意味だとはじめて知りました。」
先　生「『気がおけない』は『気のおけない』ともいいますね。一方で、本来の意味から転じて、別の意味をもつ言葉もあります。例えば、［Ⅱ］は、『不要な力添えをして、かえって害になる』という意味ですが、『力を添えて成長・発展を助ける』という意味でも使われます。」

ア　遠慮がいらない　　イ　落ち着きがない　　ウ　関係がない　　エ　油断ができない

3

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（25点）

現在、世界中至るところで文明社会を築き、繁栄を謳歌（おうか）している私たちヒト。一方、そのヒトに最も近いとされるチンパンジーは、家も建てず、科学も文化も使わずに、アフリカの森林で絶滅の危機に瀕（ひん）している。ほんの600万年前までは同じ生き物だったのに、なぜヒトだけがここまで発展し、彼らは変わることがないのか。チンパンジーとヒトをここまで分けたものは何だったのか、という疑問について考えてみる。

そもそも、ヒトの定義とはどういったものなのか。「人類」とは、今は化石でしか残っていない数多く存在した過去の種も含むのだが、基本的に直立で歩行する仲間のことを指す。※類人猿との最大の違いは、ヒトはまっすぐに立って二足歩行をすることである。例えば、ゴリラの骨格とヒトの骨格を比べると、ゴリラの骨格を立てれば、そのまま人間の骨格に見えてしまうぐらいに似ている。しかし、両者には、決定的な違いがある。

哺乳類というのはもともと地上を四本足で歩行していたが、※霊長類は頭上の木々で生活するようになった。その際、手足など体を環境に適応させ、木々の果実や葉っぱを食べられるように歯も変化させたのだ。

そうまでしたのに、①ヒトはもう一度地上に降りてきた。その時に、人間はもとの四本足での歩行には戻らずに、後ろ足だけを使い二本足で地上を歩行することを選んだ。足を、完全に移動するための道具にしてしまったのである。以降、人間の足は独自のかたちで進化を続けた。

人間の足は、親指がほかの指と離れていない。だから当然、サルのように足で枝をつかむということができなくなった。しかし、手の仕組みは変わらず、親指だけが離れたいわば4対1の構造で、どんな物でもつかめるようになっている。さらに、移動に手を使うことがなくなり、自由に使えるようになったのだ。チンパンジーの手も器用にできているが、彼らは歩行の際に手を使わなくてはいけない。結果的にこのことが、②ヒトとほかの霊長類との決定的な違いになった。

チンパンジーと分かれて二足歩行を始めた時点では、ヒトの祖先は平原ではなくまだ森林で生活していた、と最近の研究で考えられている。ひと昔前までは、ヒトは生活の場を森から平原に移し、その影響で二本足で歩くようになったとされていたのだが、森での生活の時点ですでに二本足で歩いていたことがわかった。この頃の類人猿は、二足歩行をしつつ、木登りもできるような体つきをしている。

つまり、チンパンジーと系統が分かれて、すぐに生活の場が平原に移ったわけではなく、しばらくはまだ森と平原の両方にいて生活していた。

では、なぜヒトは過酷な平原・サバンナに進出していったのか。実はその時代、地球上では乾燥・寒冷化が進んでおり、生息地であるアフリカの森林が少なくなっていた。その際に、最後まで残された森林にしがみついていたのが現在のチンパンジーであり、環境変化のためにサバンナに出て行かざるを得なかったのがヒトであった。森林をチンパンジーたちにとられてしまったともいえるが、外の世界に出て行かなくてはならなかったことが、後の進化につながることとなる。

森林からサバンナに出た彼らを待ち受けていたのは、大変に過酷な生活環境であった。まず、水がほとんど存在しないのだ。水場がところどころに点々としかないので、水場から水場へ歩いて移動するにも長距離を移動しなくてはいけない。そして気温が高いので、汗をどんどんかいて体温調節をする必要がある。この環境のために、彼らは体毛を失い、代わりに汗をかくための汗腺という器官が増えたと考えられる。

私たちヒトは暑さで汗びっしょりになるが、こういう哺乳類は実はあまりいない。ウマは汗をか

くが、イヌやネコはそんなにかかないし、そもそもそんなに長距離を走るようにはできていないのだ。ヒトの特徴の一つとして、長距離移動が可能であることが挙げられる。チーターなどは高速で移動できるが、長距離は走れない。これも汗腺と同じように、③サバンナに適応し生き抜くための、ヒトの進化である。

次に、食べ物の問題がある。それまでは樹木が生い茂る森で、木々の葉っぱや果実をもぎとって食べていればよかった。しかし、サバンナにはヒトが簡単に手に入れられるような食料は、ほとんどない。

では、彼らはこの難局にどう適応していったのか。一つは、食料を確保するために、自然を利用して非力さをカバーする道具を製作し、活用することを覚えた。石器を使っての狩りや、食物採取である。

そしてもう一つ、目標のために役割分担し複数で共同作業をすることを知ったのである。それまでのように、一人ひとりが群れの中で勝手に暮らすのではない。群れという組織において、互いが自分と相手の果たすべき役割を理解し、目標達成のために何をするかを考え、いっしょに行動する。群れ全体が自分の立ち位置と役割を意識する集団となり、こうした社会関係の理解こそが、類人猿とは異なる、ヒトをヒトたらしめた最大の分岐点になったのだ。このときを契機として、ヒトの脳は著しく進化する。やがてヒトは、ほかの動物と比べて格段に大きな脳を持つようになった。これは④過酷な環境でヒトが編み出した、生き抜くために必要な進化だったといえるだろう。

人類は二足歩行に加え、大きな頭部を持つように進化したが、その頭部で特に大きいのが脳である。最初から大きかったのではなく、300～400万年前の時点では、チンパンジーやゴリラとあまり変わらなかった。しかし、サバンナに出て行き環境に適応したホモ属が出てきた頃から、一度急激に大きくなる。その後しばらく、大きさは変わらないが、現在のホモ・サピエンスが登場したときに、またもう一段大きくなったのである。

実際に脳の大きさを比較してみると、チンパンジーの脳の容量が約380ccであるのに対し、ヒトは約1400ccある。しかも、進化の過程で単純にチンパンジーの脳がそのまま大きくなったということではなく、目の裏側の部分から頭のてっぺんにかけて、おでこ周辺にある前頭前野という部分が特に大きくなっているのだ。

その前頭前野とは、何を司（つかさど）る部分なのか。脳の働きは解析されてきたが、前頭前野にあたる部分がどのような機能を持っているかは長年わからなかった。近年ようやく、前頭前野は「自分を客観的に見る」感覚を司っていることがわかってきた。自分が何をして、何を感じているか。そして他人が何を思い、どう感じているか。自分の気持ちを参照しながら、相手が何を感じ考えているかを知るための器官なのだ。また、自分が何を欲しているかということもモニター※しているので、それと連動して、目標を達成するために、次に何をしなければいけないかといった物事の優先順位を決める役割もある。

前頭前野の働きをほかの霊長類と比較すると、サバンナに出て環境に適応したヒトが、他人の心を読んで共同作業をし社会生活を営むようになった、という進化の過程がわかるのである。

（長谷川眞理子（はせがわまりこ）著「ヒトはなぜヒトになったか」による。一部省略がある。）

（注）※類人猿……最もヒトに近縁なサル類で、ゴリラ、チンパンジーなどがある。
※霊長類……サル目の哺乳類の総称。サル類とヒト類を含む。
※モニター……監視。

問1 ①ヒトはもう一度地上に降りてきた。 とありますが、ヒトが生活の場を森から平原に移した理由について述べている段落(形式段落)を本文中から探し、その最初の五字を書き抜きなさい。(4点)

問2 ②ヒトとほかの霊長類との決定的な違い とありますが、筆者は、ヒトとほかの霊長類との決定的な違いは、どのような点にあると考えていますか。次の空欄にあてはまる内容を、二十五字以上、三十五字以内で書きなさい。(6点)

ヒトは、足を □ と
25 35
いう点。

問3 ③サバンナに適応し生き抜くための、ヒトの進化 とありますが、筆者が考えるサバンナにおけるヒトの進化として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

ア 頭上の木々の果実や葉っぱを食べるために歯を変化させた。
イ 地球上で進む乾燥や寒冷化に適応するために体毛が増えた。
ウ 汗腺がほかの哺乳類同様に増え、汗を多くかくようになった。
エ 水場から次の水場へと長距離の移動ができるようになった。

問4 ④過酷な環境でヒトが編み出した、生き抜くために必要な進化 とありますが、次は、筆者が考える過酷な環境を生き抜くためのヒトの進化について説明したものです。空欄にあてはまる内容を、**共同作業**、**前頭前野**の二つの言葉を使って、五十五字以上、六十五字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。(6点)

ヒトは、二足歩行に加え、大きな脳を持つようになったが、その中でも、□
55 65
を営むように進化した。

問5　本文に書かれている内容として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。（5点）

ア　ヒトがサバンナに進出していったとき、チンパンジーは森林にとどまることによって、食料を安定して確保できるようになったが、二足歩行をしなかったため、現在は絶滅の危機に瀕している。

イ　ヒトは、減少する森林にしがみつくことをせず、足を独自のかたちに進化させることでサバンナの過酷な環境に適応し、さらに個々が果たすべき役割を意識した集団を形成することで現在の繁栄を築いた。

ウ　ヒトの脳は少しずつ大きくなったのではなく、チンパンジーと分かれて二足歩行を始めた時点で一度急激に大きくなり、その後、現在のホモ・サピエンスが登場したときに再び大きくなった。

エ　ヒトは、600万年前に類人猿から分かれた後、過酷なサバンナの生活環境に適応するために、二本足で歩くように骨格を進化させ、また食料を確保するために、自然を利用した道具の製作を覚えた。

4

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（……の左側は口語訳です。）（12点）

今はむかし、八月十五日夜は、名におふ月の満てる時分なり。この夜は、
その名のとおり

日と月とさし望む事の正しければ、月の光もことさらに明らかなる故に望月ともいふなり。
真正面に向かい合うので

又、まんまるに満つる故に餅月といふとも申し伝へし。詩作り・歌詠みども、
漢詩人や歌人たちは

日頃より※含み句をこしらへて、ただ今作りしやうにもてなし、うめきすめきて詠み出だす。
とりつくろい　苦心しうんうん言って

さるままに日暮より雲うづまきて雨ふり出でしかば、①かねて作りける詩歌相違して、

夜ふくれども一首も出でず。「※浮世房、いかにいかに。」と仰せられしかば、
どうだどうだ　主君がおっしゃるので

仰のきうつぶき、麦穂の風にふかるるやうにして案じける折節、※鴈のわたる声聞えければ、
上を向いたり下を向いたり　ちょうどその時

「雲外に鴈を聞きて夜声を。」ととなへさまに、ふと思ひよりてかくぞ詠みける。②

雨ふれば三五夜中の真の闇二千里わたるくらかりの声
十五夜も真っ暗やみになってしまったが、その暗がりの中に、二千里渡って行くという雁の声が聞こえてくる

（『浮世物語』による。）

（注）※含み句……ここでは月見の会に披露するために前もって考え用意しておいた詩歌のこと。
※浮世房……人名。ある屋敷の主君に仕えていた。
※鴈……雁に同じ。

問1　ふかるるやうに　とありますが、この部分を「現代仮名遣い」に直し、ひらがなで書きなさい。（3点）

問2　①かねて作りける詩歌相違して　とありますが、これはどのようなことを述べたものですか。次の空欄にあてはまる内容を、十字以内で書きなさい。（3点）

月見の会のために前もって用意しておいた詩歌が、雨が降ったために、その場に［　　］ということ。

問3　②かくぞ詠みける。　とありますが、浮世房が詠んだ「雨ふれば三五夜中の真の闇二千里わたるくらかりの声」と同じ季節が詠まれている和歌として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。（3点）

ア　春過ぎて夏来たるらし白たへの衣干したり天の香具山

イ　秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

ウ　人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香ににほひける

エ　冬枯れの森の朽葉の霜の上に落ちたる月の影の寒けさ

問4　本文の内容について述べたものとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。（3点）

ア　とりわけまんまるに満ちる八月十五日の月を餅月とも呼ぶが、浮世房は、月見の会で満月をまるい餅にたとえた和歌を披露した。

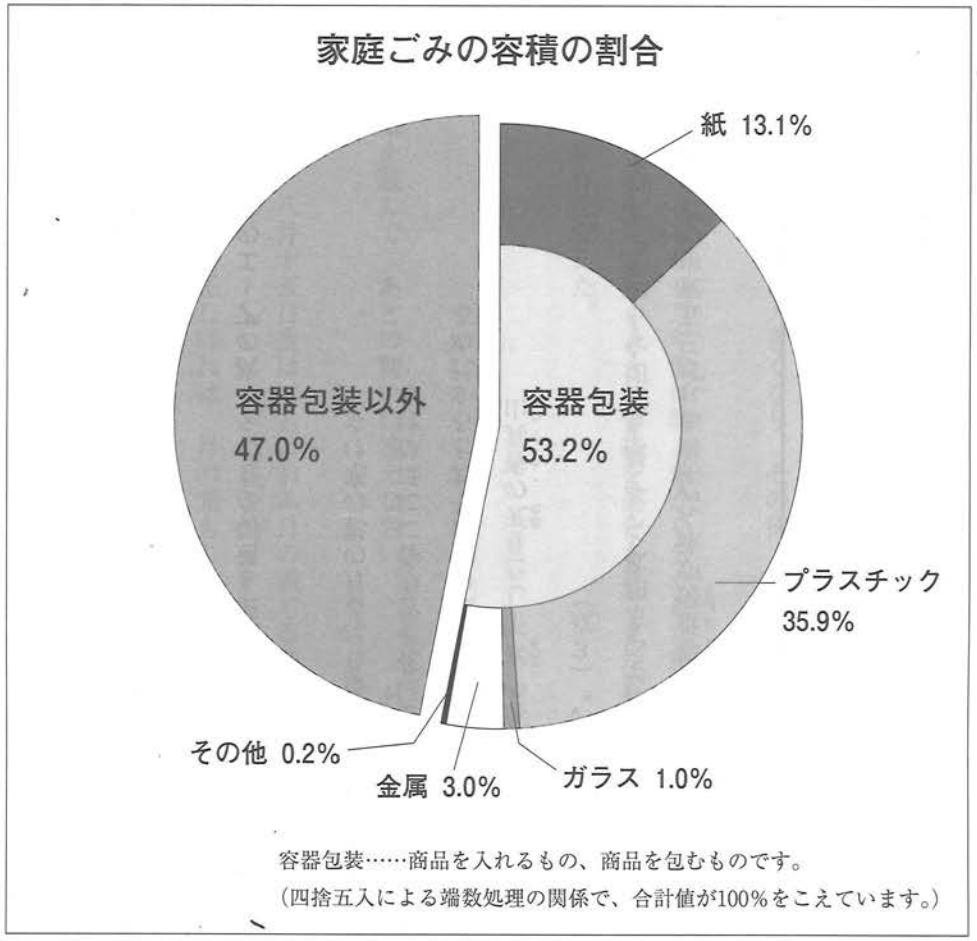
イ　八月十五日の月見の会に集まった歌詠みたちは、鴈の声を題材に和歌を詠んだが、浮世房も主君の期待に応えた和歌を披露した。

ウ　前もって鴈の声を題材にした和歌を用意していた浮世房だったが、月見の会ではいかにも悩んだふりをして和歌を披露した。

エ　主君から和歌を詠むように催促された浮世房は、あれこれと悩み抜いたが、闇夜をわたる鴈の声をきっかけに和歌を披露した。

5 次は、ある中学生が「家庭ごみの減量」について発表した資料の一部です。

国語の授業で、この資料から読み取ったことをもとに「家庭ごみの減量」について、一人一人が自分の考えを文章にまとめることにしました。あとの(注意)に従って、あなたの考えを書きなさい。(16点)



環境省『容器包装廃棄物の使用・排出実態調査』より作成
(平成25年調査)

(注意)

(1) 段落や構成に注意して、自分の体験(見たこと聞いたことなども含む)をふまえて書くこと。

(2) 文章は、十三行以上、十五行以内で書くこと。

(3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。

(4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

(以上で問題は終わりです。)